いろは朝書

寶
イ 4
2478
200

中原藏競寶

門 1 4
第 2478
卷 200

○いまく綿

あるれたしまとく四月十四日十六日ハ
禁中ふくゐのり十四日ハ男踏歌
十六日ハ女踏歌と云天子より綿弐
ゆまくいまくまて毎年ふかの年
中行事ふ貞世ハ
ゆと弐声さ〳〵聖名雲井の月
かさしの綿の白き月夜ふ
○いたとかしハとふ
神代よ我ふ出ふとく什我よ綿

へくふは石柏のかしくつの道とそく
所見て磯部を石くとけく
木葉のちくつのうきうれうれう石
ゆ玉柏とふ吉野川いた岩柏と
ゆゆしうも岩の中しと
○いの作とふ賀茂祭の時作歌
立てしへ歌ふく
○岩弥さく道とい岩ゆ物をくゆめ
ゆの道とく ○いしとの関とふ天の雲
なる物
○岩戸山あまの雲ゆ立ちくいて明ケる

雲井ふ春ハ来にけり
○ハ蛙かとふ尾張の家なり蘆(イラカ)と云
○いく葉とふ不老不死の葉之茎葉
ふあり生葉と書あり
○亀山ふ生葉をくゆられいゆ多ん
かこもなの知別式
○稲屋島とふ鶴の名とい口傳有
武一石巻知ちくふとも屋とも崔
ともいへり従ゆ多知名之定家の説
ハ石ちなし
○さよなて稲屋島の哥の哥

若いたくと思ひ立るの郭
里をとくれぬる野辺の草とまり
鶉鳴なるまでかな
秋の田は鶉鳴なるのおろまたも
稲を刈ぬ実ぬ深ぬ
早乙女（苅田の面の苫乃を
いなむ者の声いとはるまり
我門ふせくる山田の鶉は法師
鶉鳴なるの声さそ　割者云
徳ふせきて共優なる鶉鳴なる雀
と鳴と伝ると共情あり也百伝て

在の中に鶉鳴なるなるりは
の代の歌ふ様いふ言へ
○岩村も板　初瀬山とも板む板日前
若板と又いて本とい板弐云一説ハ板の筏
○命の水とハ名ん（くの半
いたを雪を志ぬ身こ越い
悲しき命のあの流るまて
○いと竹とハ糸いと琴おも　竹ハ
笙笛の歌
○鶉葉の雲とハ○の徳の雲のあい
くあ〜ある様いふそ引あ

楢原田の雨ふあいくわ彼の雲　宗祇

此句猶葉の雲のんなり

○いはまて艸（ミテクサ）堅生草と云かへに生

るるゆゑいはまくあしとそらかくあた

なるわよ用る

○長てふいはまてゆるよのいはまてと

あかくへしあのなてくそらなく

○いりるが加（ムカ）鵠と云まあらすしとふるあり

○いはなるとふしなるの事○いろ祢兄

祢云○いろ姉ふ

ろ

○ろくさくさくろ六位の官事ころ

さくしのくるのきゆと伊勢物語少有

○ろくろ櫻閣（ロウカリ）とて結構なる

家なり樓たかどのとよむ

は

○はくへゆるよとふ卯稜なる時をくへ

はなるる人　形の事　稜等と書り

紹よかくをるとよあり

○はし人の形代なるふ身ふをよ

ゑしに紀時のなくく拘よやん

宗祇玄川よるゆ山田のをくへ　卅

○泊木（バッキ） 海士の衣の手本と
あらそひて泊木の枝を習賀の
閑あるまやの内の座ぶとん
世の中は不住とかの
人心
渡辺みなと泊木を掛てゐて
濱萩のおれいたるを惜んとて人丸
夕雲のくれ田舎をうたるゐる
○花紀京 萩のおれ花所とうたる葉ハ
萩原とよめり 月見草 理右門 任子
行かり草 古枝草 何しも萩の吳竹
元禄期や霜も色ある高枝哉 西行
今年の秋も花ハ咲きけり
○地の吳竹二聲鶯を云し
枝を生そとも志ゝ出本立のリメをふ
二声鶯のうたるゝ
○大庄おの淵と山名の尾し仏郎
淵を鮒ゝ月を我影をゝ
淵の古事ゝ
山名の切河の和尾よ淵が井 人丸

[illegible]

に

○にはまつ　葉も花もまつかなること。
[illegible]

○庭たづみ　鶏頭の[illegible]
これ夜の雨戸の音を聞て庭たづみ
[illegible]

ほ

○部屋の矢名　[illegible]
だちだれも　[illegible]
[illegible]

[illegible]

○ほこ板　[illegible]
生ず　[illegible]
[illegible]

へ

○屋ねとゝの羽ハ酒のたとゝ[illegible]
何をゝ屋ねとゝの[illegible]
沖のむら[illegible]

と

○とゝの松十回の松と書　松を

百年は一度ばかり年は十度
花さくと梅よりもまづ桜の花をぞ
玄ぞ咲花の枝も霞みすく
とまりまとまる沼水
萩潟や世世の侍く無玄の花　宗祇
○とやうなよとなてとおの生も
霞ゆ生くしけ雅く赤よ生きまり竹
花咲ゆるるつるゆるるんーーよ
○ゆめゆめとくらくいまの年も
ゆめ生きき侍く鳴るゆ家花の
八重紅梅の花咲ぬちーー

ち

○ちーー海むーーきりーー沼家ち
ちーーろむーー夜吹風や宮かーー
ふくれたいふとよるるあゆ
○ちとせの板とい　年の祝ん年も

り

○りくきとい風賦北奥雅頌の
六義も　むくちとく和歌紫の花は
又理色のちくさ色や深らん　宗宇

ぬ

○鳴る玉とい美我いゆ

ぬるゆよりしたしく知人なれ　戯

なるをゆるる床の行灯くらしも

朝かをゆるゆみとをとをとを式　心敬

風も弱小夕氣掛れあきかぜハ　宗祇

○出花るよとハ麻の一名なり

る

○るう　あやめさをるうるうのをる

さをるる鈴虫をとるうるる

○るうの色ハ空却も弱ゆ留の糸　宗長

○るうきゝんとハ　おろ浮くの呉竹

を

○ながらの木　正月松竹の像なり

木こ鬼くちゝ木ゆ云こ　口傳

○鬼の志許ゆ　鬼の腰ゆ高人の事こ

云れゆ　細ハ法をゆれハ

鬼のをこゆこと　よゝ云りり

右ゆハ家持の坂上家古歌ゆ送る

奇こ離絶數年後會桐岡注事

分といりたとくハ云ゆ久ゝ妃女

ホあるゆこ分のんハ云れ人と生れと

云云れとゝんこ鬼のをこゆよハ紫

苑の名こ物云れ無ゆこ願ハ額事

あるしの人の植て見たるべかりしすもるべし

わ

○わらの菓　正月七日七竹　蘭藁（ナツナ　ヒエ　ラ）　ゆつみく

祝ふて芹なづな　御形　おぎく　たびこ

仏の座　須代　すゝしろ　ほとけの七竹

○わらの菓　初茅　いばらの茅　おさなの茅　ちがやの茅

つゆ　ほつみて　ゆつるもろこし　茅の

穂よ　かるひの茅　秋名　の茅竹

けふ　ものさ　ものさ　死の上のおさなのつ

茅　源氏の君　よりを　ひしく

味のおく　ものろ　て　業平

まゝ　ほろみ　穂よ　けよ　見ゆる　茅竹を

人の　ほ　人　業平　ものそ　ふ

初茅　のなと　穂　ものの　茅そ

返

ら　茅　ら　初　見　ひ　る　ル

見　ものこ　ル　初　茅　い　へ　る　中　し

何の　人　あ　の　人　茅　ら　し　と　ゆ　る

意　俗　も　又　茅　の　下　そ　し　よ　宗祇

意　と　ら　業　も　又　見　ま　茅　竹

の　何　の　人　あ　そ　や　下　を　よ　人　を

結　人　の　ち　る　ぞ　り　と　付　る　る　の　ル　し

○日ゝの異名　山振　茅と云　蘭　有り

山根等打くゝ山師のうるさや
いへばとおよ花かさしるるあん
山里等梅色のさきはじめそいづる
をうぶのこそ人の問ひきれ
○若菜の異名　二葉の新菜
みよし野ゝ雪のそのの紅葉まつとよ
人おれぞ打人そる
子日供物十二種若菜
か　菱　若菜　蕗　菖　芹　蕨　蕺　水葵　水雷雲　松　蓬
○かぞへ等梅の異名
佛山ふみを降し雉陵ぼ等
南風ものかぞへ等のかも
○かぞいと名とは　藤氏の異名
厂の異名絵しみのそしはそうを等
かぞれや名のちの風等う
梓弓引やかくよう紙屋く
かぞいと名の居地とぼく
○かぞ名　魚名　雲の山よりうう
片恋するもとゝうまれくた
呼春の魚名とよう一流弱の
異名や赤い鶏ヒスイ知ナリ或い雉の
雄名ともいう
○かみ等とは　屋一日餅の京亜大

根之又或い春ハ大根共陸奥と云 夏い
赤橘花秋い朝の角を い松と云り
、葉すりい赤茂をもち云の陸奥葉
さかりの頃を久しく花 右大根共陸奥よりあり
、夏のよい
小麦のくれ陸奥たらさく花の
色ハくれなひ 是を赤橘花とよめり
、草い何とある花のかみを陸
ろもろの細いあられと
是を草とよめり
、冬のよ冬月も高来かんるよ
小松の新そをしを墨をる

花ハ松共陸奥よりあり
○一房の呉名 二番よりあるとよぶ
、何方共高とをや二番よりあの
年よ二度作ハあるとん
○ひさしーあるとい 葵の半も
、神多葉ふのあれあれのひさし44
長文代りけるく杉や形らん
○かくたーとい竹共をし
、夜と苦よ吟をかをし花 角柱
毎日ますはれるをれの文
○ひぎをるよとい 都の呉名

○かしこうとふ高うの事し

よ

○よもぎいろ〳〵の位あり 古今
傳授の人あり〳〵ふちゝれ〳〵あり
春の色とかりんねるく白ふ用
ひらるへし

○よあらとふ 女ゐるといふ事ら或
云よあいふ〳〵ふゆ〳〵いふゐ迄一位よ
くはをとゝ云ゐる

○海をゝをゐるんひゐる我ら和
ぬれく成れ赤くふとをよゐ

○ゆ〳〵ろい御ゐまとふ 牡丹の事し
天皇人をやりく孫らんよゝろ
い御ゐまゐ殿ゐりあり

○よとゐるよ あく〳〵ふと四季ゐよ
と書く よろひいゐよ 牡丹し

○四の位 琵琶 びわの事し

○よひしの花とふあぢさいの花し

○よみちの国とふ 黄泉し

た

○たゝちゐ たゝちゐ女
父母ゐ云玄孫乳母 玄孫乳男 父し

生乳男とも又ゑのちの稚兒文殊

ゑとうるよ云初く

きてうちの紙の袖のふの葉形

袖のまきあるよきるとうあを

きてうちの紙のうりと何のいそる

んをあり中絶ゑとゑれを

きてうち保をかれをくしそ

うたをの素足髮ゆあくまゑ

○たゑ舟　川舟之高瀬さすも

たゑをとすとすると高瀬さすも

稽服のんゑをくく高瀬さす

竿のたゑくよ袖をぬれ思る

言際舟ふく斗ふ葉をの

なのれてくる古井川の那

○たるゑ　清瀧の岩別の中

たるしいをの笑花清瀧を

水結ふさめる水なり俱を水柱

ゑたるしとも云り

朝日さを水のたるしをゑうう

なとゑ清瀧のむするん

朝日とや今朝ふうふさはん

汗のたるしの下のゑ

○たむけ草とは　松の葉之首ハ
花のさく末ハ三ぐ毛あるをて人
願所に玄賞したり
遠ふ年経りふ春の桜の高き
いくよ志ほ〻袖うちもぬらん
○玉江草とハ芦の葉之
夜川のあしのかり稲そしをある
玉江の月の明ぬ〻ゝ
○玉くしげふたかみ山
帽筥のふたと法けるを又嘆
我身云詩云玉匣三更冷漢雲又唐

葉に玉くしけ河のくるる夜ふかるる
夜ふかみ山ゝ都中の玉の名ふかり
ふたかみ山ゝ都中の玉の名ふかり
後古今集家持うた
むかし玉の夜やるよぬんむくしけ
ふたかみ山ゝ月かたふきぬ
又玉くしけ二見の浦伊勢の名所之但馬
橋廣も同名有金葉集本居情弘
玉くしけ二見の浦の貝ふけ
蔭伊勢よりある松のむ〻之
○重うむ〻ろ　水浪ゝ社ふよ

なれば紋ふかるべし或は繪かくとも
いへり 鈴源の為ふかくべし 竹葉
も出 篇とも書

○玉かづら 為中の石ばいふべ
義淀江のそまくほもるまむらしい
ふるく垂ふ人ばえめや
知せいや昌の入江のむらしい舟
さす棹の下こあるべく
わしるほそよ志はほそく見ば和
いはあらるれて見ばいりん

○玉くしの葉 柳弟

○神風や玉くしの葉ばかきし
問ふの言よ 言ばこそ
濯くふ玉くしの葉ばよ
天照光りんく代へ出ん

○竹の葉名 千尋葉 伊勢
タ玉葉
家門ふ名 河ふ陰ばくほい
葉多ば作ふかれさふ屋
右ふ伊勢物語よ有よ名の竹ば仙家有
秋風ば家なふ松よふよ
河ふよ言ふ言ふあをきまし

月ホ雪夕月雪の秋風よ
雪いろ〻の霜の花なる哉
右二首花玉ホ見へそう

○橘　廣橘（ヒロノヲタチバナ）　吳名　昔名　庭古
名　乃きふるよ
ふるよ右の月の細れ
たれたちたるや雲ふるらん
五月まつたれ橘の香をかげば
むかしの人の袖の香ぞする
右ハ小田道の間ものと云人伝常
世の国へ渡りし橘伝ものと云

と勢強く文古ホ海ら帝九年
ゆゑに嶺御巻るけ橘伝袖に伝
しみ〻帰来ものれ香れ出も多くて
伝らよ陵ホ拾て〻忽死ぬと云
切ものて右ら橘の宣　令下
送れしかと五月待ぬ袖の香を
ゆゑ昔ものれ伝はん
橘亜し伝ホ昔の度古ら聞ら
花の今の思ひ〻

○蓬と牛いたよの哀と朝毎ら
春と小蓬橘伝袖ら自毎ら夏〻

、鳥屋より八月八日葉師の日なり
たゝ蚕にはね虫の葉なり
卯月八日より入て七日十四日より
毎度入て〻葉我(約)なり是を
季の葉我はむしの葉より劣
○玉兎と河〻れの事〻
○玉の蕊と云事我いふ〻
○玉の枝と蓮葉を有んを富〻
又玉を有んものあり事〻

れ

○れいなり〻ぬと云事〻

れ

○れんよ事と云輩の事〻

り

○そめ色の山 須弥山の事〻蘇
迷盧(メイロ)山と書 山山は四寶を用て作
事〻 水は黄金 東は白銀 南は瑠璃(ル)
西は赤玉 珠〻 但(タヾ)金偈(ケツ)なと書〻
水は黄 土は青〻 東白西紅
不そめ色の山
○桂里の花と云 仙翁花(センヨウケ)の異名
、夏草の高けみは交るなれは
それ雪もきて事りはる哉

山ざくらの花の咲ける時見おく
花の咲のうれしさにて引捨て見ぬ親
のいまし見ぬる時よりなんとなん
○夕暁とは秋夜を慈悲なる下生の
高野山深世のうもさるやと
真暁ぬやうこぬ夜をなるかな

つ

○法華経とは釈尊の中道の法花
経育の中は白蓮華なり
月夢の花の心やうるるなん
咲るも仏の袖の色の邪

○法華経　鶯の生れ
樹陰よりこそ空成花なれ
飛鳥なかれて花成る
山深く法華経　人丸
月夢の花の法華経
○法華経　みほくの生れ
法華経のほくとは篠繁い玉の
かとも月法華経の有る仏かく
いへるし　○法華経有る色なとは
たち花又は唐もいへり　○法華経
後松の年も　時松も

○ぬすひと萩とハ 尾花之露想萩と云

○ぬれさきとハ 初真の夕顔の名也

秋風ふ不あらひ難し蕣を海

ぬれさきやふきりしは鳴

古今雑體ふあり不あらひなる萩

おかはの我 ぬれさき とあり きりし

すの一名 我さ勝とし

○つきみ草 萩の異名也

○つまかし草 蓮の事也

ね

○ねちけ人とハ 無情人の事也

ならさかやこのてかしはのふたおもて

とにもかくにもねちけ人かな

奈良坂ハ般若寺の事也 このてかしハ

ハまたおもてと云木之裏表ともに

同しくと言る葉之ことなり小児の

手ニ似たり

萩季

○ねさめ草 萩の異名也 家隆卿の歌よ

秋とてハいかなる夜半も寝覚草

かせや萩の葉の音とおもふらん

○根白草 芹の事也

萩季

瀬ふふ浪とて花よ桔る草

[illegible]

○[illegible]の花 蘭(あらん)の花

む

○むぼの花とは[illegible]むぼで花[illegible]
[illegible]の山のむつで花[illegible]の
[illegible]

○むくさ花のちる　[illegible]

○むくさ花の香　仙家の[illegible]

う

○うきぐさ花　白木(ケヤキ)の花(こしをぬけ)

あさうく汐干のゆぐ[illegible]くとの
うきぐさ花の色ふかきや
[illegible]
[illegible]

ぬの花の異名を変　蘭出　和名抄

○ぬばたまのこゝろ

宮ぢ　監　ものいふこゝろの血戒女はけ
ふく陰陽こゝろ　小さこゝろ　世の蠱毒
也女不とい外こゝろ血おちさこゝろ　右いこゝろハ
ちなこゝろ　生ゆり　古死井をこゝろ　ゆけ
ゆ　仍て尾なめ　実の手足外こゝろ
陰をこゝろ　いもりの血　印こゝろ　女人の心
ぢふ　ぬれば　私惱　ゆる時　法こゝろ
おちすといふ　あれよ　あて　戒ちる
こゝろ書外　作こゝろ　あい女のいる　あれい
世界ちる　獲こゝろ　ゆ　名外こゝろ

花菖蒲　和名抄

ぬの花の異名を変　蘭出　和名抄

○ぬばたまのこゝろ

宮ぢ　監　ものいふこゝろの血戒女はけ
ふく陰陽こゝろ　小さこゝろ　世の蠱毒
也女不とい外こゝろ血おちさこゝろ　右いこゝろハ
ちなこゝろ　生ゆり　古死井をこゝろ　ゆけ
ゆ　仍て尾なめ　実の手足外こゝろ
陰をこゝろ　いもりの血　印こゝろ　女人の心
ぢふ　ぬれば　私惱　ゆる時　法こゝろ
おちすといふ　あれよ　あて　戒ちる
こゝろ書外　作こゝろ　あい女のいる　あれい
世界ちる　獲こゝろ　ゆ　名外こゝろ

○ぬばたまのこゝろ

宮ぢ　監　ものいふこゝろの血戒女はけ
ふく陰陽こゝろ　小さこゝろ　世の蠱毒
也女不とい外こゝろ血おちさこゝろ　右いこゝろハ
ちなこゝろ　生ゆり　古死井をこゝろ　ゆけ
ゆ　仍て尾なめ　実の手足外こゝろ
陰をこゝろ　いもりの血　印こゝろ　女人の心
ぢふ　ぬれば　私惱　ゆる時　法こゝろ
おちすといふ　あれよ　あて　戒ちる
こゝろ書外　作こゝろ　あい女のいる　あれい
世界ちる　獲こゝろ　ゆ　名外こゝろ

博物志と云書ニハ、りに条、我が家にて世の中ニ
なるべき事也、一説のるする事をそ
ものれば、ものをすれば、きこまるる
ものの記あるものを、外典、内典の伝ハ遠
ある也

ぬく者のこまなるこのかたちなれ
いとそこ〳〵今の行〳〵
ぬく者のこあると云ハ世のみそこを法ゆ
ハたれまる者のおの法を記きあつて妙記
おろる事ハ〳〵さそかくとなる事

云るなよたがきこまは法けし黒の色の
あるなハ人ないうあるへし
あるものもこの妙ハ人魔の
ものもこるる張こあ

の

○の記の件とハ人ものの星魔
た

○花の件といふ事の星魔又松
公義件ともこ云
く

○紅塵とハ紫陽花の異名

言葉ばそいろ〻の紅之葉ちりも
紅なり道もむくさきちりといへり
連歌
紅のちり積葉の木葉哉
○くれなら　時雨ちりの
古山路のせゝの時雨ふるなり
鶴の声くもの雲まよりいくる
○くれ初そ　仙境より降之　嫁取と有
○信島　石信濃ら岩〻
年ふるたゝ見さかる岩〻
や
○山ぶし　曇雲と云
曇の雲の中之又日新と云件もいて
夜の明方東の空ふり雲有夕ぶしハ
神祇曇と云題ふれ山ろゝと斗よゝる
ふるゝ
○ゆ紅ゝくのあるしの山の山ちと人
とゝんゝふ山ぶし
居の長遠山ぶし　宗祇
○山橋　花白件　花ね件　ぢり件
ぢり件　ゆり件　ハはれる牡丹の
ふゝ花も牡丹も花の王之
○やはの雑ゝとハ　ホ　八峯とゝ

沖地山の八峯の椿とも云又ふけのさと
とハ云い書ハ云ふる思ふ者ハ毎ひき紙ハ
入り給ふハやさけハ八ツ峯かすると
花の紙ハ武ハハ八峯の桜ハ 宗紙
武ハハとハ云ふ山紙千歳を経ると云ふ

ま

○たい名とハ 大方物のすし
おとりすむ物とも有
たい名すむ人あてのあれの花武
き物よりかきつけきもんこもかも
○松の吳名 豐花 十ふ武 ふ毎

於州 目ふ武州 琴引州
河ふ武毎ふ流る宿の名武と州
風と云ふ武時よ云てあ
名よやたるらきもん時武十ふ武州
久し武宿の名よ流る
信者やきしのあとりの名州
ふ名あしてふるらんふを近
いなかもいそいふ武野ハ
郷よ云ふ武於州かと
さな武ふ流の云ふけふに空ふ所の
国ふ武州よあしらし山もふる

後夜琴引竹のおとさやう
あらしの庵のよるの風

○ま葛かけ法師物語

○まうらと指氏ふまうこそ云

ふるしをよまうらなくきを芦刈
山の月あらはるるやのあるを

け

○まむらのまあと法師るまの牛

ふ

○笛をしむしとはきうう鈴ふ

古筆のあるとゝし

○蛙て法むし秋もいまとあきちか
かしあるしなるるるよるなう

○蛙と聲者とは槍の長名し

二季ふ者は一月我ふ

こ

○こ花ゝよかしは

小原のまよ似ふかしはの葉一位女
帝花の年とうは一時物語と
云く時の月ふ物ふあるあるは二表之

○なう法やあのよかしはの二ありて
ふよもかくまもれけ

[illegible]ちけん[illegible]人[illegible]柏の葉の
[illegible]
たこのとと[illegible]
むさし野の小萩ゝとゝ[illegible]たるゝ
[illegible]
○おうぎ草とゝ 草の矢名ゝ
あるゝ[illegible]
[illegible]
○ホのゝ[illegible] 猪の牙ゝ
[illegible]
[illegible]

江

○[illegible]草とゝ 草人ゝの牙ゝ

て

○てりさ花とゝ 牡丹のゝ

あ

○あうぎ草とゝ 蓮の[illegible]
[illegible]人の[illegible]草よなれ[illegible]
[illegible]
○あこうとゝ [illegible]
[illegible]
[illegible]

○あさがほいぬるゝと　柏の葉はまた
うるほぬるとゝ
あさ伯ぬるや川ちのゝ
はのゝ　ぬれ
○あまるとゝ　法ためぬ又法を
たよう
大キ　ゝ　ゝのあ
ゝ　雲ふ
○あゝかゝとゝ　柏の葉
さ
○蓮花の笛　八の年
さゝ花の笛夜深ゝ雪と有ゝ

○さゝらをゝとゝ　百合ゝとゝ
私に云賜ゝ
蓮の梅の花笠ぬゝ　家持
ゝゝふさゝ
○さいひこ丸とゝ　ゝ
さいひ米おくゝ
ゝ　枯ぬゝ
○酒ゝ半　神ゝ　三日
と云　三寸　仙薬　流泉　なと異名
又ゝ酒ゝ
賢人と云　酒と云宗ゝ

酒の名我聖といひし古の
おほきおとゞのよろしさ　又かミ酒
と云ハ毒説あり　一まハ神酒と云
又一ツハ口かミ　米我かみくきて
昔ハ酒我作る事也　又一夜酒とハ
あま酒の事也　年中作る事有之
いつも我も出来ぞすること八月の
にごりのささけも若くまふし
醴（コ）酒（ガケ）とハ係に作る酒也　是一夜
酒し事

き

○菊の異名　○百夜草　○星見草
初見草　○かゝ見草　○ほし見草　○はま例草
乙女草　○千代見草　○よハひ草　○乃おきな草
○ちぎり草
右之内　初見草ハ冬菊の異名あり
○きちかうハ　桔梗之ひとへ草とも云
あきちかうのハなりにけり白露の　友則
おける草葉も色かはりゆく

ゆ

○由良寺き　十二面と云志んの事也
我とのむ七の社の四まへ老

うけてもたりのの[illegible]ふる[illegible]

○ゆきゝはなの花　家ゝ[illegible]

寄わらいをさかりふ枯ぬ橋の中の　赤人

あなゝこゝろのこゝろこの世きゝさかの花

め

○月よりぬ[illegible]ちとふ数のまをげふ原

[illegible]

み

○三角柏いの中　かりそめ[illegible]

神[illegible]やこたの柏よ[illegible]

[illegible]

右三角柏とハ三葉かしハと云し

伊勢大神宮に[illegible]三ツの柏[illegible]

[illegible]

たはふ叶たゝぬかのとあしさて

たはふそして神よ[illegible]

又日本記ハ師綱葉とも[illegible]

[illegible]式ハ三綱柏と云國史ハ

三角柏と云り又三葉かしハとも

[illegible]又[illegible]のかしともよ[illegible]　惟親

[illegible]ハ[illegible]月[illegible]

[illegible]人[illegible]三ハ[illegible]の柏とおし[illegible]

思ひいづる海の底の藻屑の
志賀の浦なみ
右の歌は三月の頃水ふくまり
かしらふよりたちはなれ
出の叶島
○みあの浦
赤山路の木陰あてなく
やすき海に
○三月きすぶるとき
夏三月の不と
ごとくなし

人丸

向う

三月あの雲ふくるる
おとそ年の三月すぎ
○みき草とは
我が宿のうき根ふまる三枝草の
花も咲ふなり
○みきとは草と云
る物なり
赤やの泥岸吹風の
泥沼
○三毛草とは
ばまくちて蛍とある

仲秋

蒲と云草

五月雨の小雨そぼ降りて
人〻多い三井〻寺に詣でる

○道ゝとめ件　卯の花の半し

○郭公とハ　松の葉茂し

○志の〻葉茂とハ　笹の半し　さゝ原
似て何茂〻茂し　家の辺のきいるし

ち〻ち茂よ志の〻茂るまの明方も
蕨〻〻〻　袖の〻〻〻〻〻〻〻

○志のふまハ　菖蒲又金菖とも
志志のふまと志し茂と口伝信吉

まそハ菖蒲高き茂とよ志ち伊
家宿の形の志のふまことよもて
国の名を志伊ら志ちれるまう邦

○志ぢ茂とハ　母とゝきすし

○花よもの見山里高り高多茂
邦花ちの形と邦ちやすし

○志伊玉姫とハ　蕨し

春山ハ志ら玉姫の立つ時を
見まく海〻けふ花鳥を見め

○志なが茂とハ　桔梗の半し

拾貴作事所

まん人
の和

志凡ヶ為いゑの子ニ冬ニ成鶯
鴫々の称をおとし作さ々那し

ゑ

ひ

○ひをむし　鳶の夏也

日暮ぬと啼なもやむる深山路ニ
ん身をくも鳴をききる

○ひ鳥むれ為とハ　雲雀部也
春の野ニむ鳥日あ為の上なし
白根のうちニ声やすへ侍し

○氷面鏡（ヒモカゝミ）　氷の夏也

龍清紀岩ちの水のひも鏡
とけくも　春ニむかふ哉
若くむすいの明りはと見や云も鏡　俳画

○日新草とハ　あさひの事也

○ひとへ草とハ　きくのこの事也

も

○百ノ千鳥

万の鳥哉何ぬ鳥しとなり　一流（やり）
鶯也　鶯ハ諸鳥の先し也　ハ
諸鳥を鶯一ツ子諸鳥哉二先ありとも
去つ但信文ある鳥声のたやすくハ

志て〓くし
冬の鳥也末ハ千鳥のむとつに爲て冬ぬ
鼓我限川 鳴のそん冬に成なく 和泉雪
百千鳥とは 雀らいふん
○しみど鳥 麻の実落し
○しら紙葉草 蓼の実落し
●しとめ八草 ちよの花実落し

せ

○石燕（セキエン） 零陵山と云所に石有
雨（アメ）の下には石燕となりて飛ハ晴（ハレ）
九月又石にかへるといへり

尻ハ燕の一下渡りの声 宗伴
石燕の渡りくる深き渡りかな

す

○すゞ鳥とは きじの事也
雉子ハ子故おしみて野焼の焼る
あとたゞすゝきなく 焼死るし 貞之
宗鑑も 子故思ひとくやすゞ鳥
野も鳥越 焼火への原と燃りぬる
○すみれ草 石一夜鳥又一名一葉草
○すくもの虫 多田きはむ也
○すゞけ花 松の花也

十ヶ所ばかり

鳴せぬ山の立てるを不学四季の

海を渡る風のなり合

追加

一、海を渡る舟

我が国の偏屋の鳴くなるを

今舟中に風を厚い事をけり

けるさまを清博士の人

伝へ聞て事きしぐべし

けり所は事を言ふと

為信を行へる時のけ地

然ば源義朝の妻の

事ども

おとゝ仕まつる中を

おり居る色も声を聞し地

初一の矢を少ぶし

乗る高ありいた

風と雲ともんを

なりくしまよ

知る人安箕の国

庭を祀りへる

りうれく偏屋

いてなる

秋の長夜

鳴せぬ山の立てるを不学四季の

海を渡る風のなり合

追加

一、海を渡る舟

我が国の偏屋の鳴くなるを

今舟中に風を厚い事をけり

けるさまを清博士の人

伝へ聞て事きしぐべし

けり所は事を言ふと

為信を行へる時のけ地

然ば源義朝の妻の

事ども

おとゝ仕まつる中を

おり居る色も声を聞し地

初一の矢を少ぶし

乗る高ありいた

風と雲ともんを

なりくしまよ

知る人安箕の国

庭を祀りへる

りうれく偏屋

いてなる

ふるとこれをいしたる事ゝ時
田より徧照おしてゝ
おけたりとこと云ふ
加賀ゝ北事ゝ越前国
有ゝ丈夫ゝ字て安藝の國ゝ通
人ゝとこハ皆ゝ
たるゝ越中ゝ大和河内の人を
河内ゝ行ゝ田人の俗ゝ伝ゝ
○吉兵衛ゝ北ゝ長谷ゝ一本ゝ
むゝ武人ゝ越ゝ
唐き壁ゝ月ゝ

また名所ゝ
清ゝ北ゝ
壁ゝ姫ゝ
記ゝ
此野ゝ
ぬゝ
あゝ
ゝ
○山吹ゝ
菅大和の
山城の國 井ゝ

通ひける事ふかく思ひ深入給
ふ男女の親子なれば
互ひに事ふかの男女紫いろふか
思ひ慣れたるとは今より始め
何事叶ふ度ごとにいろ〳〵
陰徳ありて互ひに仲をよく
保つて家ゆたかに何の事
時に此陰徳怠なへしといふ
てまめ敷のりとふ堪能の陰の
年の暮しふよう山吹生ま
ふ男女繁ふ有りしてあり

此所ふ住人ゝ欲深ける親
しき長者ゆて陰徳ほうかなして
家ゆて又堪む其年の秋又
しおらう草葉〳〵生ま
其時男さそい娘のん何とそ
こんれ言ふとそ

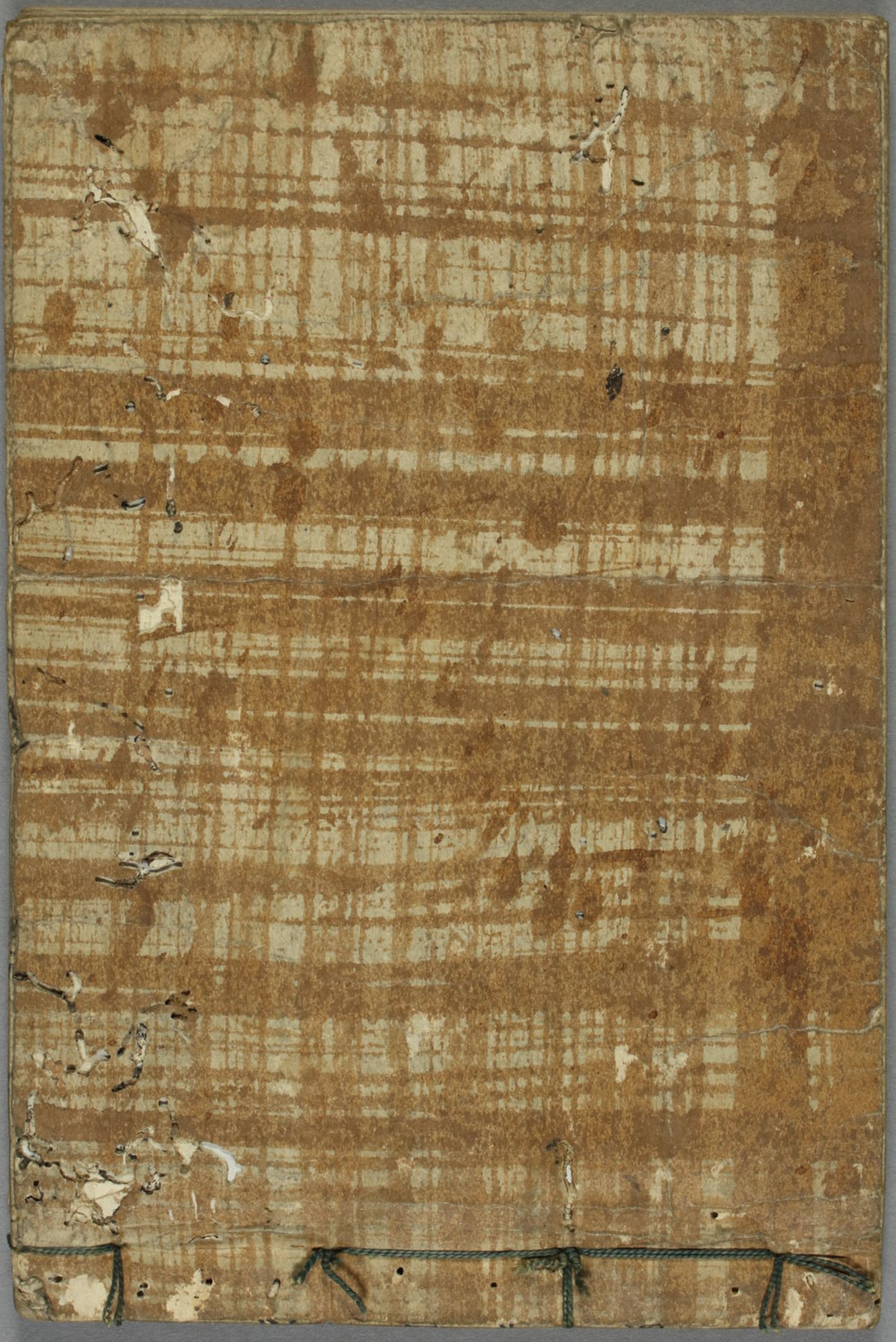
天明元年暮秋日
每為先生傳授写書
之者也

萬頃

右全授与訓蒙不可
有他見編脫者也

天明二稔

西見乃頃丈

洞院近衛北

中原藏